

## 西の口・鬼塚・若江遺跡の調査

— 平成 4 年度 —

平成 5 年 3 月

東大阪市教育委員会

## は　し　が　き

生駒山麓から河内平野にかけて広がる東大阪市域には、縄文時代から歴史時代にかけての遺跡が、約130ヶ所あまり存在します。

こうした周知の遺跡の中には、よく知られた瓜生堂遺跡や鬼虎川遺跡など、弥生時代の大集落である遺跡が含まれています。埋蔵文化財を包蔵する土地、すなわち埋蔵文化財包蔵地の区域で工事を行う場合、届出が必要で、例年400件をこえる届出があります。これらの計画に対し、必要なものについては協議の上、発掘調査を行なうなど、遺跡の保存・記録に努めています。

その中で、本市では「河内平野遺跡群発掘調査」事業として、個人住宅建設に伴い、どうしても事前に発掘調査が必要なもの、あるいは保存対策上確認調査の必要な遺跡を対象に、例年2～3件の発掘調査を進めてきておりますが、平成4年度は、西の口遺跡・鬼塚遺跡・若江遺跡の3遺跡内での住宅建設に伴い、発掘調査を行ない、西の口遺跡・鬼塚遺跡では、古墳時代の集落関連遺構、若江遺跡では末期の若江寺関連遺構とみられる建物土壙を検出することができるなど、大きな成果を得ることができました。

今回、三遺跡の調査の概要をまとめ、報告することになりましたが、過年度に未報告の若江遺跡第49次調査の概要も合せて収録しました。

調査の実施・報告書の作成にあたってご協力を受けました関係各位には、心よりお礼申し上げますと共に、本書が少しでも活用されることを願うものであります。

平成5年3月

東大阪市教育委員会  
教育長 森 分 最

## 例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が国庫ならびに府費の補助を受け、平成4年度に「河内平野遺跡群発掘調査」事業として、個人住宅建設に伴って実施した、西の口遺跡第3次調査、鬼塚遺跡第17次調査、若江遺跡第54次調査の概要報告書である。本書には、過年度調査で未報告であった若江遺跡第49次調査の概要を合せて収録した。

2. 各現場の調査期間は、次のとおりである。

西の口遺跡第3次調査 平成4年10月15日～10月23日

鬼塚遺跡第17次調査 平成4年10月26日～11月10日

若江遺跡第54次調査 平成4年11月16日～11月26日

3. 調査関係者及び担当者

社会教育部参事（文化財課長） 畑 信二

文化財課長代理 吉川正光

文化財課主幹 原田 修（西の口遺跡・若江遺跡調査担当）

文化財課主任 吉村博恵（鬼塚遺跡調査担当）

文化財課 上野利明、千葉蓮美

4. 本文の執筆は、各々の担当者が行った。

5. 調査の実施にあたっては、飯島市次郎、菱田全彦、屋根下和男、奥野 采、諸氏のご協力を得た。また調査及び整理に関して財団法人東大阪市文化財協会職員の中西克宏、金村浩一、井上伸一諸氏の協力を受けた。明記してお礼を申し上げる次第である。

## 目 次

### 西の口遺跡第3次調査

1 調査に至る経過.....	1
2 遺跡の位置と今回調査地.....	1
3 調査の概要.....	2
(1) 層序.....	2
(2) 検出の遺構と遺物.....	4
4 小結.....	6

### 鬼塚遺跡第17次調査

1 遺跡の概要と調査に至る経過.....	7
2 遺構と遺物.....	7
3 小結.....	9

### 若江遺跡第54次調査

1 調査に至る経過.....	11
2 調査地の状況.....	12
3 調査の概要.....	12
(1) 層位.....	12
(2) 検出の遺構と遺物.....	12
4 小結.....	14

### (付)若江遺跡第49次調査

1 調査の概要.....	15
2 各トレンチの状況.....	15
(1) 第1トレンチ.....	15
(2) 第2トレンチ.....	16
(3) 第3トレンチ.....	16
(4) 第4トレンチ.....	17
(5) 第5トレンチ.....	17
(6) 第6・7・8トレンチ.....	19
3 小結.....	20

## 挿図目次

### 西の口遺跡第3次調査

第1図 調査地位置図.....	1
第2図 今回の調査地.....	2
第3図 検出遺構平面図・層序断面図.....	3
第4図 出土遺物実測図(1/4).....	5

### 鬼塚遺跡第17次調査

第5図 調査地位置図.....	7
第6図 遺構平面図と断面図.....	8
第7図 第5層および落ち込み内出土遺物実測図.....	9
第8図 穴住居跡内出土遺物実測図.....	10

### 若江遺跡第54次調査

第9図 調査地位置図.....	11
第10図 今回の調査(第54次)地.....	12
第11図 検出遺構平面図及び層序断面図.....	13
第12図 出土遺物実測図(1/4)(1/8).....	14

### (付)若江遺跡第49次調査

第13図 調査地位置図.....	15
第14図 調査トレンチ位置図.....	16
第15図 第1トレンチ平面及び層序図.....	17
第16図 第2トレンチ平面及び層序図・第7トレンチ断面図.....	18
第17図 第3トレンチ平面及び層序図.....	19
第18図 第4トレンチ平面及び層序図.....	20
第19図 第5トレンチ平面及び層序図.....	21
第20図 出土遺物実測図(1/4).....	22

## 図版目次

- |                     |   |
|---------------------|---|
| 図版1 西の口遺跡第3次調査遺構    | 1. 調査地検出遺構全景(南より)<br>2. 同上                      |
| 図版2 西の口遺跡第3次調査遺構    | 1. 古墳時代の遺構(北より)<br>2. 溝6内の須恵器                   |
| 図版3 鬼塚遺跡第17次調査遺構    | 1. 壁穴住居跡(北側)検出状況<br>2. 魔検出状況                    |
| 図版4 鬼塚遺跡第17次調査遺構・遺物 | 1. 落ち込み検出状況<br>2. 壁穴住居跡内出土遺物(1)                 |
| 図版5 鬼塚遺跡第17次調査遺物    | 1. 壁穴住居跡内出土遺物(2)<br>2. 落ち込み内出土遺物<br>3. 第5層内出土遺物 |
| 図版6 若江遺跡第54次調査遺構    | 1. 土壇南半(西より)<br>2. 土壇北半(西より)                    |
| 図版7 若江遺跡第54次調査遺構    | 1. 土壇北端の瓦列(南より)<br>2. 南西部分の上塗等(南より)             |
| 図版8 若江遺跡第49次調査遺構等   | 1・2 第1トレンチの状況<br>3・4 第2トレンチの状況                  |
| 図版9 若江遺跡第49次調査遺構    | 1. 第3トレンチ遺物埋納ピット他<br>2. 同上出土状況                  |
| 図版10 若江遺跡第49次調査遺構等  | 1・2 第4トレンチの状況<br>3. 第5トレンチの状況<br>4. 第7トレンチの層序   |

## 西の口遺跡第3次調査

### 1. 調査に至る経過

平成4年8月4日、所有者の飯島市次郎氏より、本市の東南端、八尾市境に近い東大阪市横小路町3丁目1396番地において、住宅を建設したい旨の「土木工事等による発掘届」出があった。住宅の基礎は、約1m程掘削の予定で、文化財への影響が考えられたため、本市教育委員会では、工事に先立つ試掘調査を実施した。

敷地は、約168m<sup>2</sup>あり、同月28日に試掘調査を行なった結果、古墳時代の須恵器・土師器・製塙土器片を含む遺物包含層を検出した。

このため、届出者に対して設計変更による保存を指導したが、設計の変更が困難であるとのことから、工事によって破壊されると考えられる部分約75m<sup>2</sup>について、平成4年度の河内平野遺跡群発掘調査事業として、発掘調査を行うことになった。調査は、平成4年10月15日より23日までの間に実施した。

### 2. 遺跡の位置と今回調査地

西の口遺跡は、本市東南端、生駒山の西麓にあたる横小路町3丁目一帯に広がっている。



第1図 調査地位置図



第2図 今回の調査地

周辺は、市域の中でも比較的開発が進んでおらず、八尾市境周辺にかけて、田畠が広がっており、その一画に市立繩手南中学校がある。今回の調査地は、学校北側の道のすぐ北に隣接する建設予定地である。

本遺跡は、昭和59年に同校の新設工事に先立って行われた試掘調査で発見されたもので、昭和60年の4月から12月までの間に、2回に分けて計2367m<sup>2</sup>の校舎建設部分を中心に行なった。(財)東大阪市文化財協会に委託して、発掘調査を実施した。

この結果、本遺跡が弥生時代から平安時代にわたる複合遺跡で、削平を受けながらも弥生後期の壇基・溝・井戸状遺構・上塙のほか、主として古墳時代後期の掘立柱建物跡5棟、建物内外を区画する溝2条、

庄内期の井戸状遺構2基のほか、平安時代の上塙3、井戸2基等が検出され、5世紀後半に周辺に比較的大きな集落が存在していたことが確認されている。<sup>(1)</sup>

また、この調査に統いて、昭和62年に同校内、校舎東側に計画されたプール建設に伴い、一部区域(41m × 3m)について、第2次調査が行われたが、第1次調査で検出されていた弥生後期～庄内期の溝の続き、土塙等が検出され、当該期の土器が多量に出土している。<sup>(2)</sup>

今回の調査は、3次目の調査にあたり、同校正門の北側の南北通学路より2筆東側の土地で、標高は約22mを測る所である。これまでの調査成果から、同様に古墳時代後期の遺構・遺物の出土が予想された。

### 3. 調査の概要

#### (1) 層序

これまでの調査による西の口遺跡の層序の在り方として、弥生時代～歴史時代の遺物包含層は、後世の水田造成等により、比較的浅い所に削平されながら、遺存している状況にある。

耕土・床土下には、近世の水田整地層があるが、水田の東半にあたる部分では、弥生～平安時代の堆積層ないしは遺物包含層を削り取っており、同一面で多時期の遺構が検出されている。

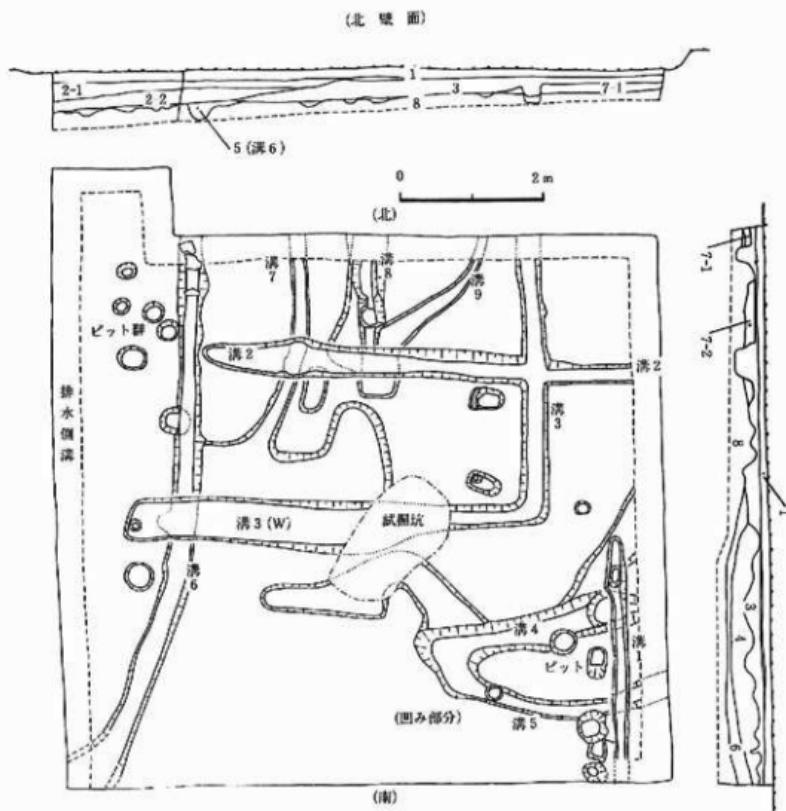
今回の調査地点でもこの傾向は同様であるが、古墳時代より新しい時期の遺構は、検出していない。層序は次のとおりで、

第1層 耕土層

第2-1層 灰黄色土

第2-2層 暗灰黄色土

(水田造成整地土)



第1層	耕土	第5層	黒褐色砂混粘土
第2-1層	灰黄色土	第6層	黑灰色砂混粘土
第2-2層	暗灰黄色土	第7-1層	黑褐色砂質土
第3層	暗灰褐色砂泥土	第7-2層	黑褐色細砂壤土
第4層	黄灰色粘土(シルト及び粘土のブロック土層)	第8層	暗茶黄色粗砂質粘土

第3図 検出構造平面図・層序断面図

第3層	暗灰褐色砂混土（古墳時代後期後半）
第4層	黄灰色粘土（シルト及び粘土のブロック土層、凹みを埋めた整地土）
第5層	黒褐色砂混粘土（古墳時代後期の遺物包含層）
第6層	黒灰色砂混粘土（弥生後期～庄内期）
第7-1層	黒褐色砂質土
第7-2層	黒褐色細砂礫層
第8層	暗茶黄色粗砂質粘土

(地山層)

となっている。調査地の西側1/3は、水田造成により、3層は削られており、水田造成土層である第2層のすぐ下に第5層の古墳時代後期初めの遺物包含層も削られ、遺構が直下に遺存している状況にある。

## (2) 検出の遺構と遺物

検出した遺構は、溝多数のほか、不規則なピットが主な遺構で、これらは主として三時期に亘るものである。溝1は、近世の耕作溝で、新しい。

調査地の北半を東西・南北に直交する直線的な幅約25~30cmの溝や、南東端から屈曲する溝4・5などは、暗灰褐色の砂混土が理土となっており、とくに目立った伴出遺物は無いが、層序から見て、古墳時代後期も後半期の遺構とみられる。

これらの遺構の内、溝4・5の周辺では、凹みのあった個所を黄灰色の粘土塊で埋土整地した上に溝がつくられている。

本調査地の南東側、第1・2次調査で検出された掘立柱建物群と同時期と考えられる時期の遺構として、溝6・7・8・9及び西側に検出したピット群がこれにあたる。

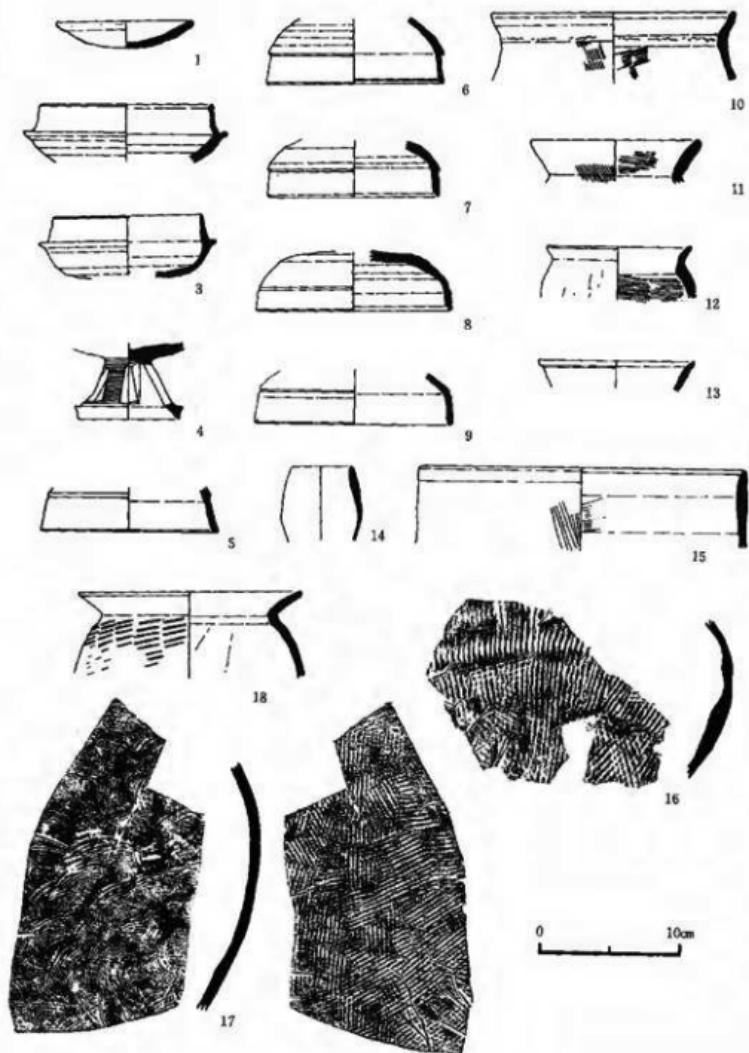
調査地南半は、北側から傾斜する浅い凹地地形となっていたようで、北から続いてきた溝7・8・9は、この凹地の方へ終る形で排水される溝とみられるが、最も西に検出した幅約40cm、深さ約20cmの溝6は、やや南端で西へ曲がりかけんぐで、さらに南へ続く溝で、この溝の西側には、径30cm~40cm、深さ25cm程度の円形ピット数個が存在している。

ピット群は、小範囲であるので、どういったものか不明であるが、第1次調査地では、掘立柱建物群の西端を南北に面していたとみられる溝(S D65)外の西側区域に、不規則な径約50cm、深さ約20cm程度の柱穴状のピット群が検出されており、その関連が考えられる。

出土遺物は全体に少く、遺構に伴って出土した遺物も極めて少い。溝6の北端、溝内より比較的大きな須恵器壺の胴～底部破片(第4図16・17)が出土したにとどまる。遺物は、南半の凹地に堆積した第5層中より、須恵器の壺蓋・身、短脚高壺片、土師器壺、高壺片、製塩土器等ほか、青色ガラス製小玉片1点が出土した。

南半の凹地の全容については、計画されている住宅の基礎の軟弱化を考え、一部の確認にとどめたが、底部に弥生時代後期の土器片を含む第6層の黒灰色砂混粘土層が存在し、同期のカメ片等を含んでいることがわかった。

図化できる遺物については、第4図に示した。1は、水田整地土層より出土した径9.5cmの



第4圖 出土遺物実測図(1/4)

土師質小皿である。須恵器坏身（2・3）、高坏（4）、坏蓋（5～9）、土師器の壺、小型壺、深鉢等（10～15）は第3・5層の包含層より出土したもので、検出した溝等の遺構の時期を示している。坏は径12～13cmの深身の古いものが多い。

14は、この時期に多い土師質塙土器で、口径4.4cmの丸底形のものである。18は、凹地底部より出土したタタキを施す弥生後期のカメで、口径15.6cmを測る。

#### 4. 小結

今回、小規模な面積であったが、本遺跡の3次目の調査として、一圓の状況を把握することができた。

これまでに行なわれた第1・2次調査により、繩手南中学校の敷地北半より以北にかけて、弥生時代後期の塙棺墓のほか、古墳時代後期前半を中心とした掘立柱建物群で構成される集落跡がさらに広がることが考えられてきた。

今回の調査地は、建物群の検出された場所の北西隣接地にあたり、同時期の溝、ピットを検出することができた。

遺構の状況から、具体的な建物跡の形跡を特定できないが、柱穴状のピット群や、排水施設としての溝の検出は、北方箕後川までの間の広範な平坦地域に、なお集落が広がっていることを示すものである。今後の調査に期待される所である。

注(1) 下村晴文・菅原章太「西の口遺跡第1次発掘調査概要－市立綱手中学校分教場建設工事に伴う第1次調査』1987年 財團法人東大阪市文化財協会

(2) 菅原章太「西の口遺跡第2次発掘調査概報」『(財)東大阪市文化財協会概報集1989年度』1990. 3 財團法人東大阪市文化財協会

## 鬼塚遺跡第17次調査

### 1. 遺跡の概要と調査に至る経過

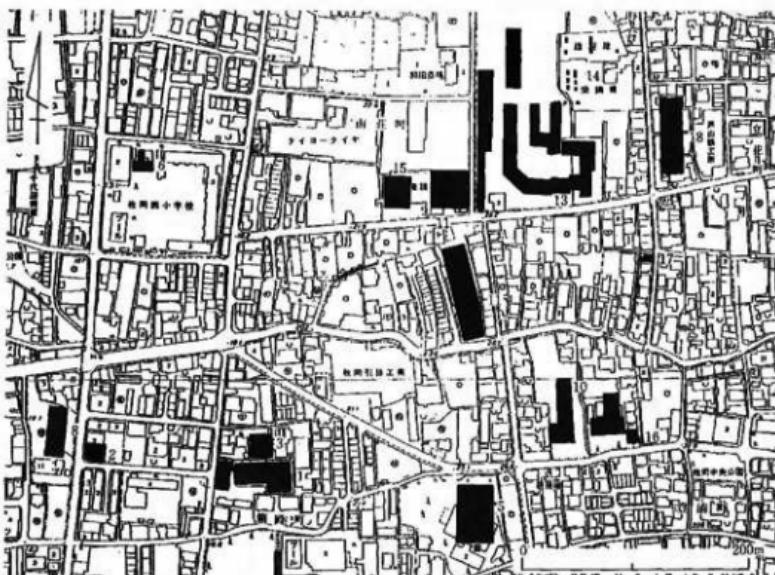
鬼塚遺跡は縄文時代から室町時代に至る複合遺跡である。昭和35年以降18次にわたる発掘調査を実施している。これまでの調査で、縄文時代の住居跡・土壙墓、弥生時代の方形周溝墓・竪穴住居跡、古墳時代の掘立柱建物跡・水田跡、奈良時代～平安時代初頭の掘立柱建物跡・井戸跡、平安時代後期～鎌倉時代初頭の掘立柱建物跡・土壙墓、室町時代の石敷遺構などとともに各時代の遺物が多量に出出土している。

調査地は、標高31mの扇状地緩斜面に位置する住宅および工場地域の一画にある。試掘調査において土師器・須恵器・瓦器の破片を含む遺物包含層を確認したため、住宅建設に先立ち平成4年10月26日から11月10日まで発掘調査を実施した。調査は掘削する土置きの関係から、反転して東西2回に分け、約60m<sup>2</sup>を対象として行った。

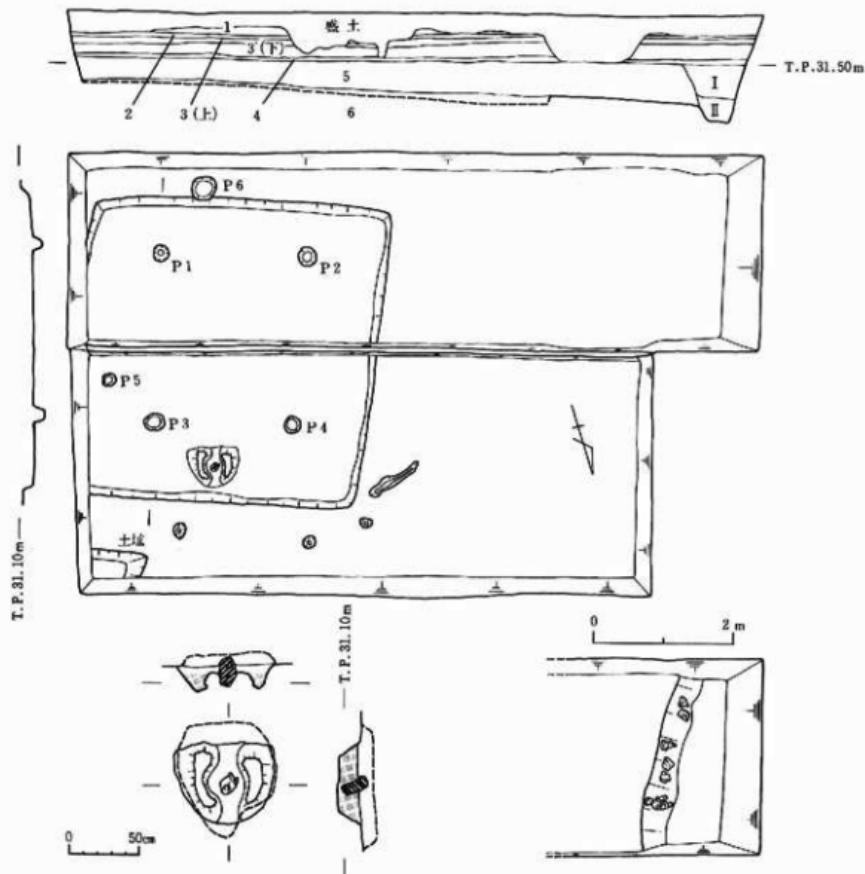
### 2. 遺構と遺物

第1～4層は近・現代の耕作土および床土である。

第5層～灰オリーブ色(5 Y4/2)疊・砂混じり粘質土は平安時代末期の整地層と考えられ、瓦器碗・皿、土師器皿とともに弥生土器・須恵器、土師器、製塙土器、黒色土器などの破片を



第5図 調査地点位置図

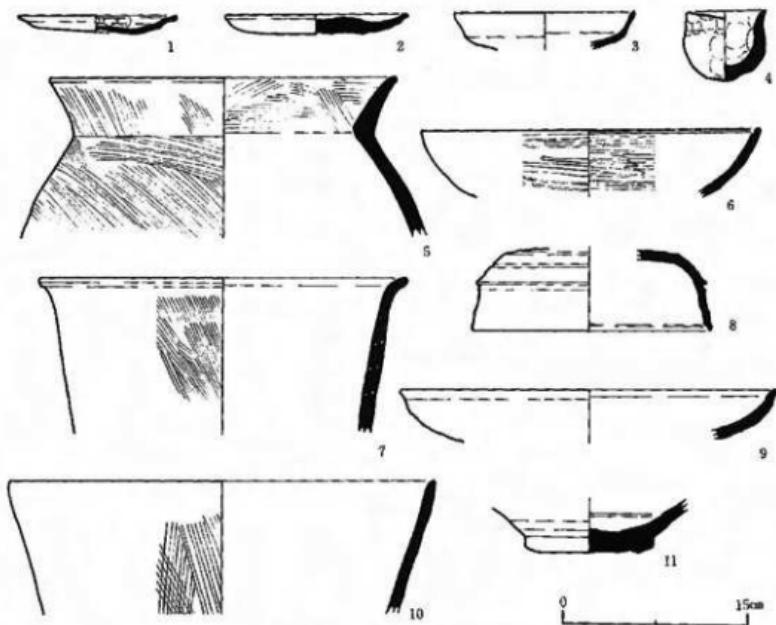


第6図 造構平面図と断面図

多く包含していた（第7図）。調査地南西部において、この層の落ち込み（段）を検出し、その斜面からは多くの石が出土した。これらの石は整地のおり、全面に組んだのではなく、部分的に張り付けていたと考えられる。この落ち込みは、下層から白磁碗・瓦器皿・土師器皿片が出土しているが（第7図11・3・9）、近世まで機能していた。

第6層—オリーブ黒色（5 G2/1）礫・砂混じり粘質土—は地山であり、その上面において堅穴住跡およびピット・土坑を検出した。

ピットのP6はオリーブ灰色（10 Y6/2）繊・極細粒砂で埋まっていたが、無遺物。堅穴住跡埋没後のものであるが、時期不明。径33cm、深さ14cm。



第7図 第5層および落ち込み内出土遺物実測図

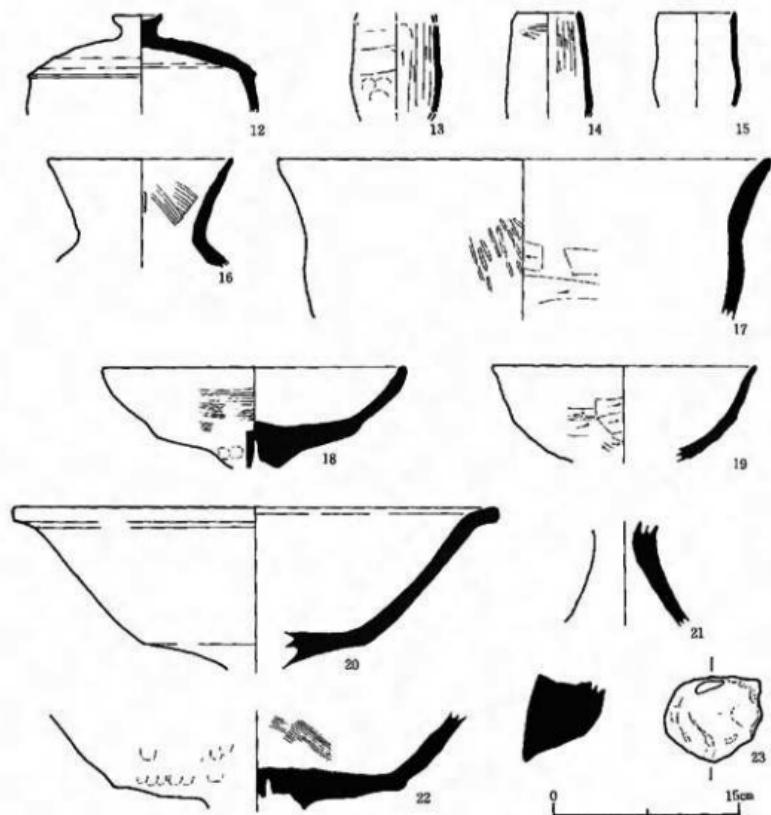
土塙は調査地北東隅で検出したため規模不明。灰色(7.5Y4/1)細礫・砂混じり粘質土内から須恵器・土師器の小片少量出土。古墳時代後期のものと考えられる。

竪穴住居跡は一辺4.2mの方形プランで、北側辺中央に作り付けの竈が配されていた。床面は検出面から30~35cm掘り込まれておらず、周囲に溝はなく、径13~15cm、深さ15~20cmのビット4個(P1~P4)と径8cm、深さ9cmの小ビット(P5)を検出した。住居跡内はほとんど灰色(10Y4/1)細礫・砂混じりシルト質土で埋まっており、須恵器(壺・有蓋高壺・大甕など)、土師器(高壺・瓶・甕など)と製塩土器の破片が出土した(第8図)。

竈は上部および後部が潰れていて、馬蹄形状に検出し、中央にハンレイ岩の支脚があった。竈跡はにぶい橙色(5YR4/6)ないし橙色(5YR6/6)を呈し、前面幅68cm、奥行き56cm、高さ17cmが残存し、上面および周辺には多くの製塩土器・土師器(甕・高壺)・炭の破片があった。竈は床面に長さ80cm、幅68cm、深さ10cmの不定形の土塙を掘り、ほぼ中央に縦長に割ったハンレイ岩(長さ17cm、幅9cm)を立て一下部は小石で支えていた。暗オリーブ色(2.5GY3/1)砂礫混じり粘質土で埋めていた。その上に灰色(5Y4/1)細礫混じり粘土にて竈を作っていた。

竪穴住居は上記の出土遺物から5世紀後半に建てられたと考えられる。

### 3. 小結



第8図 壺穴住居跡内出土遺物実測図

鬼塚遺跡は、縄文時代以降各時代の遺構・遺物が多く発見されている。古墳時代においても前期の掘立柱建物跡、中期の掘立柱建物跡・水田跡および馬骨・桃核などを伴う配石祭祀遺構、後期の壺穴住居跡・掘立柱建物跡などの遺構と、土師器・須恵器・製塩土器・轉式系土器・馬の骨・未製品を含む碧玉や滑石製の玉類などの遺物が多く出土している。後期の壺穴住居跡はこれまでにも検出しているが、作り付けの壺をもつものは今回がはじめてである。ただし、6世紀初頭の移動式壺は第8次調査で出土している。東大阪市内において作り付けの壺をもつ壺穴住居跡は植附遺跡（第3次調査）ではほ同時期のものを発見している。

また、今回検出した第5層および落ち込み（段）は平安時代末期のもので、本遺跡の広い範囲で平安時代後期から鎌倉時代初頭に行われた整地の一部と考えられる。

## 若江遺跡第54次調査

### 1. 調査に至る経過

平成4年8月26日、所有者の屋根下和男氏より、本市中央部、八尾市境に近い東大阪市若江南町2丁目53-8番地において、住宅を建設したい旨の「土木工事等による発掘届」出があった。住宅は、当初基礎杭施工によるものであり、周辺の例では浅い所から中世の遺物包含層が検出されることから、本市教育委員会では、工事に先立つ試掘調査を実施し、以後の指導を行うこととした。

敷地は約150m<sup>2</sup>あり、その後基礎の施工法の変更がされたが、10月13日に試掘調査を行った所、西北方の水田より約1m程高くなっている土地であるが、近年の盛土が少く、旧耕土下より深さ約1mの所までの間に土師器片・瓦器片を含む遺物包含層を検出した。

これにもとづき取扱いについて協議を行ったが、設計の変更等が不可能であるとのことから、工事によって破壊されると考えられる部分約65m<sup>2</sup>について、発掘調査を行うこととなった。

調査は、平成4年11月16日～26日の間に実施した。なお、調査地がせまく、残土の関係から南側2/3を先行して調査を行ない、つづいて北側1/3の調査を行なった。



第9図 調査地位盤図



第10図 今回の調査(第54次)地

域と推定されるものの、明確な遺構が検出されていないのが現状である。

今回調査地のすぐ東側畠地において、昭和47年にトレンチによる確認調査が行われたが、近世以降の盛土が相当あり、総作のウネや瓦積井戸1基が検出されている。

### 3. 調査の概要

#### (1) 層序

本調査地は、西側～南側にかけて近世の陶器片の混る灰黄色系の焼土の混る土層で整地理土され、さらに下部には同じく近世前半頃と考えられる茶灰色砂混土の整地層が存在している。調査地の南半には、こうした整地が行われる以前に存在したとみられる堀状の深い落ち込みが確認でき、内部には暗灰色～茶褐色系の粘質土や青灰色粘土、灰色中粒砂層が埋土となっている。整地層の下には、建物の土壤とみられる灰色ないしは黄灰色土で盛土された遺構が存在し、北～東側に続いている。西側の一部分には土壤造成時に削平等をまねがれた、第8～2層の黒褐色粘質砂混土層があり、比較的多くの瓦器片・土器器皿片等、12～13世紀代の遺物包含層が存在した。細部の層序は第11図のとおりである。

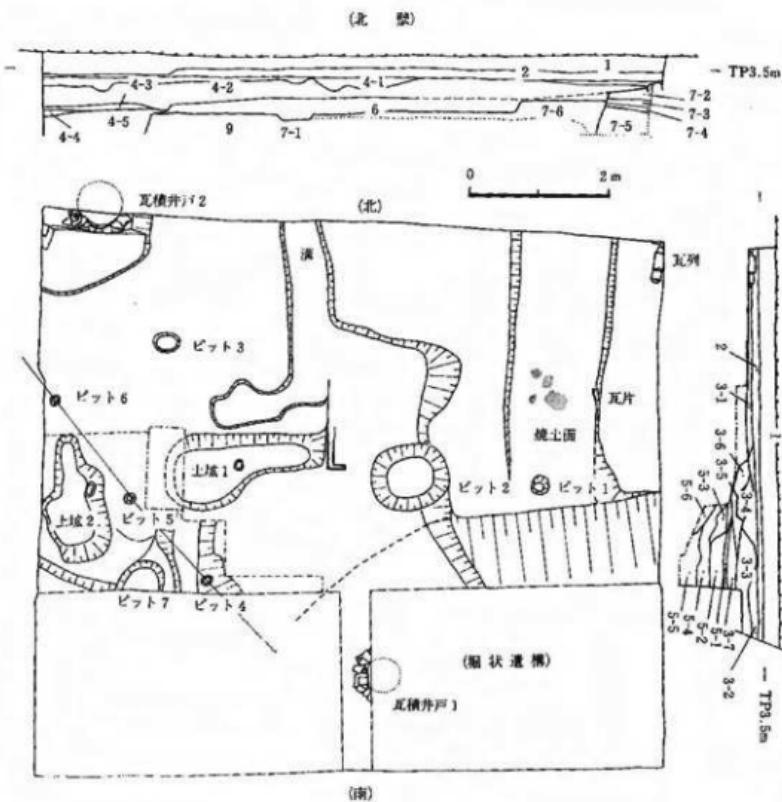
#### (2) 検出の遺構と遺物

上部整地層上面において近世末期の陶器片及び瓦類を廃棄した長方形の土塹2ヶ所を検出した。東側の昭和47年調査時と同様の瓦積井戸2基を検出したが、上面部分の確認にとどめた。使用瓦等から近世初めごろのものと推定される。調査地の南半には、南北方向に続く掘状の落

## 2. 調査地の状況

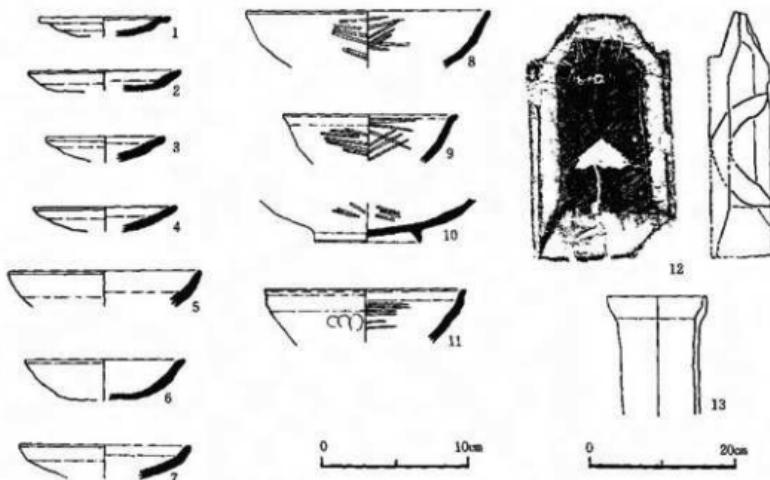
本調査地は、河内平野の中央部、古くからの若江の集落から西へはずれた位置にあたり、山賀遺跡との境界に近い。すぐ南側には、古くから利用されてきた十三街道が東西に通じており、本調査地を西端にして、道沿いから東側集落にかけて一段高い地形をつくっていて、式内社の若江鏡神社地と同じく塚があったともいわれている。

若江遺跡の調査は、北方府道の道路改良工事や若江小学校の校舎建設工事、下水工事等、工事のたびごとに発掘調査を進めてきており、中世若江城の姿が明らかになりつつある。若江寺に関連する瓦類も各種出土し、同神社の西方区



第1層 砂土	第4-1層 鮎浜色土	第5-6層 暗浜苔色粘質土	第9-1層 唐河色粘質土
第2-3層 沼澤土(灰色土)	第4-2層 高原色砂質土	第9-2層 鮎浜色砂質土	第9-2層 鮎浜色砂質土
第3-1層 喜灰色砂質土(深泥)	第4-3層 低灰青色土	第9-3層 低灰青色土	第9-3層 低灰青色土
第3-2層 喜灰色砂質土(深泥)	第4-4層 喜灰色砂質土	第9-4層 喜灰色砂質土	第9-4層 喜灰色砂質土
第3-3層 喜灰色砂質土	第4-5層 喜灰色粘質土(井戸埋土)	第9-5層 喜灰色粘質土(井戸埋土)	第9-5層 喜灰色粘質土(井戸埋土)
第3-4層 喜灰色粘質土	第4-6層 喜灰色粘質土(上面は鉛分かたい土)	第9-6層 喜灰色粘質土(上面は鉛分かたい土)	第9-6層 喜灰色粘質土(上面は鉛分かたい土)
第3-5層 喜灰茶褐色粘質土	第4-7層 喜灰色土	第9-7層 喜灰色粘質土	第9-7層 喜灰色粘質土
第3-6層 灰色~浅灰色シルト質砂質土	第4-8層 喜灰色土	第9-8層 深灰色粘質土と茶褐色土	第9-8層 深灰色粘質土と茶褐色土
第3-7層 喜灰灰白色(灰褐色)砂質土	第4-9層 喜灰色粘質土(茶褐色粒混)	第9-9層 喜灰色粘質土(茶褐色粒混)	第9-9層 喜灰色粘質土(茶褐色粒混)
	第4-10層 喜灰色シルト質粘土	第9-10層 喜灰色粘質土(遺物含合土)	

第11図 検出遺構平面図及び層序断面図



第12図 出土遺物実測図(1/4)(1/8)

ち込みを確認している。瓦積井戸1は、その埋上中に構築されていることがわかるが、堀としての幅は不明、深さは1mをこえるものである。時期は中世後半～末期と推定される。

整地層の下に、約10cm程の二つの東西段差をもった土壇を検出した。土壇は、東側上段部に瓦質の土管及び丸瓦2を並べ、段差部分にも瓦片を残している。中央の段面には、黒色の焼土面がのこっており、上段は、炭や焼土塊の混る土を盛り上げたものである。土壇の西側には、並行する浅い溝があり、南へ開く形で終っている。溝の西には、1.8～2.0m、深さ約10cm程の不定形な土塙1・2が存在する。ピット3も同時期の径25cm、深さ20cmの小さな柱穴状のものである。土塙2の周辺の凹み部分に残る遺物包含層である第8～2層を除去した結果、時期の古いピット7及び小ピット列(ピット4～6)を検出した。小ピットは、径・深さとも7～8cmのものである。

#### 4. 小結

今回の調査は、予定される建物の基礎まわりの軟弱化を考え、十分な調査確認ができたとは言えない。しかし古くから周辺の水田と畑に相当の高低差があり、この地形差が何を表すものか注意していたものであるが、今回、何らかの建物の土壇と考えられる遺構を検出し、東側の敷地にかけて、同時期の建築遺構の広がりが考えられる所である。土壇に使用されていた丸瓦等(第12図12・13)は、土壇の時期を示しているものとみられ、十三街道の西口に設けられた末期若江寺関連の建物土壇の一部ではないかと考えられる。

## (付) 若江遺跡第49次調査

### 1. 調査の概要

本調査は、平成3年度事業の1つとして、平成4年1月から2月にかけて実施した試掘確認の調査で、奥野 采氏の依頼を受け、敷地内にトレンチを設定して、遺跡の状況の把握に努めた。調査は、前記報告の第54次調査地の東側、若江鏡神社の境内地で、若江南町2丁目483番地にあたる。調査地は、第13・14図に示したとおりで、若江の旧集落部にあたるため、周辺に住宅が密集し、調査例は少い。

調査は、原則として幅1mのトレンチによる試掘調査ということで、対象地内に第1~8までの長短計8本のトレンチを順に設定し、各々の地点の状況を確認した。

調査地周辺は、標高約4.3~4.4mを測り、調査地内はそれより少し高く、神社本殿周辺の西半区域は5mを越し、西南隅の一画は6mを越え、小高い地形を形づくっている。もと周囲に周濠がめぐっていたようで、南~西にかけて近年まで幅約7m程の濠が遺存していた。

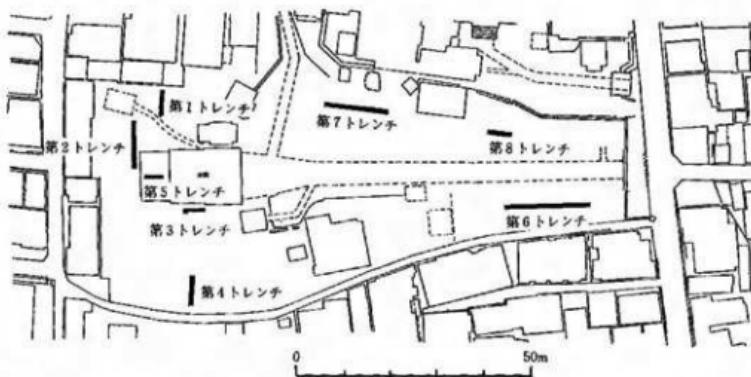
### 2. 各トレンチの状況

#### 1) 第1トレンチ(第15図)

本殿の北側に南北に設定した長さ6mのトレンチで、北へ若干傾斜している。層序は、図面



第13図 調査地位置図



第14図 調査トレンチ位置図

のとおりで、間に灰色粘質土を挟むが、黒褐色系の土が主体の第5層までは近世の瓦や陶器片を含む他、近年の神社関係の遺物を含んでいる。トレンチの中央から南へ次第に厚くなる第6層暗茶褐色土は、整地等の盛土層とみられ、新古瓦類が主体であるが、全体に約20cmの厚さに続く下層の第7層灰褐色土中には、瓦器腕片を含み、7層は鎌倉時代の前半、6層はやや下つて中世後半期と考えられる。遺構としては、第8層暗黄灰色砂質土上面で梢円～円形の大小ビットを検出しており、周辺に同時期の遺構が広がることは確実である。

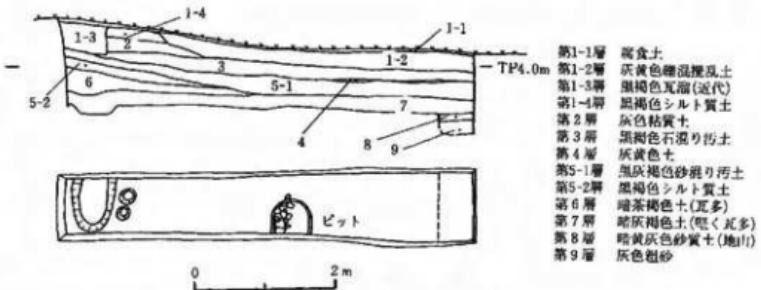
### 2) 第2トレンチ（第16図上）

第1トレンチの西南近くに南北に設定し、長さ11mを測る。この場所は、南側へ高くなっている。トレンチのすぐ西側はもと南北の濠があった所で、現在でも約1.6mの段差となっている。トレンチの層序は第16図のとおりで、黒褐色系の第5層までは、第1トレンチと同様に近世以降の遺物を含んでいるが、下層の第6層暗灰褐色～暗黄灰色砂質土や第7～1層暗灰褐色粗砂礫混土、さらに青灰色シルト質粘土と黄灰色細砂のブロック土の第7～2層とも、厚さ50～70cmの厚い整地盛土層が存在し、南端下部にはさらに瓦を多く含む暗茶灰色粗砂系の盛土層が存在し、この層は北半では見られなく、ひじょうに堅い暗灰褐色～暗黄灰色シルト質粘土層があり、凝灰岩片や鎌倉期以前の瓦等を若干含んでいて、第1トレンチの状況とは異った層序の状況が見られた。

明確な遺構は、確認できなかったが、整地層の上面（近世初頭）でトレンチ東半が南北に落ち込んでいることが状況がみられ、神社本殿まわりの造作の一部とみられる。

### 3) 第3トレンチ（第17図）

本殿の南側の東西に設定した長さ約5mのトレンチである。このトレンチの層序は、第1・2トレンチの状況とも異なり、上半は暗茶褐色土の混りは多少あるが、第3層以下第4・5層と黄褐色系の盛土となっている。下部の第6・7・8層は、共に第2トレンチの6層に近い層で、茶褐色土の盛土整地層である。これらの層の下部第9層上面には、幅60cmを測る高い部分



第15図 第1トレンチ平面及び層序図

があり、これに接して2つの円形ピットを検出した。1つは径50cmの柱穴状のもので、他の1つは黒色に仕上げた台付火舎と土師質の皿10枚あまりを埋納した径50cm×約80cmのもので、室町時代(16世紀前半)前後頃の社殿造営に係る祭祀遺構と推定される。

以下の層については、トレンチ東半のみ掘下げて下部の確認を行ったが、厚さ約30cmの黄灰色細砂と淡青灰色シルト混土からなる盛土整地層(第9-1層)が続き、この層を除去をすると東端部分の中世瓦片を含む茶灰色の粘土層を残し、土壌様の段差が造られていることが判明した。時期的に明確でないが、土師器皿片や瓦器碗の新しいものが混じり、鎌倉時代末期以降かと推定できるのみである。

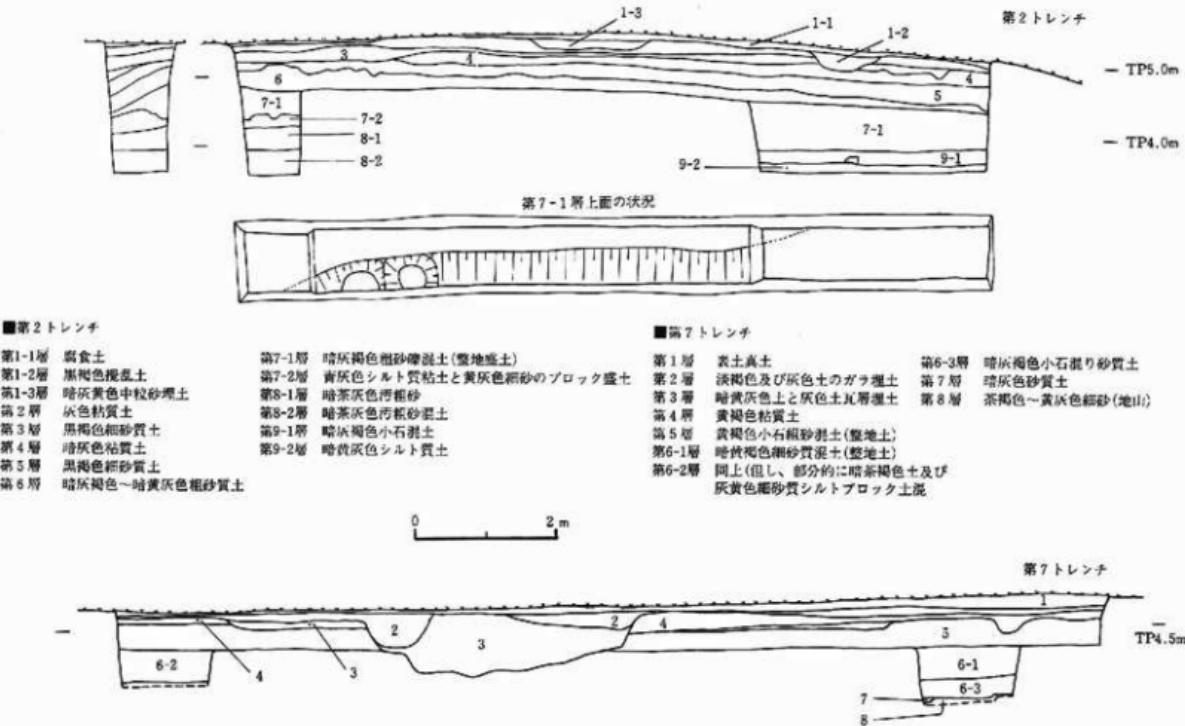
#### 4) 第4トレンチ(第18図)

調査地西半南端に南北に設定した長さ6.7mのトレンチである。本地点は神社南側の堀にかかる場所にあたっていたよう、現状では北側が高く、南端では約60cm低い。調査を進めた結果トレンチの南半はかなりの残土が近年捨てられ、堀が埋められているが、もとは古墳の墳丘端状の地形を呈し、約1.7mもの比高で南側の濠へ低くなっていたことが判った。

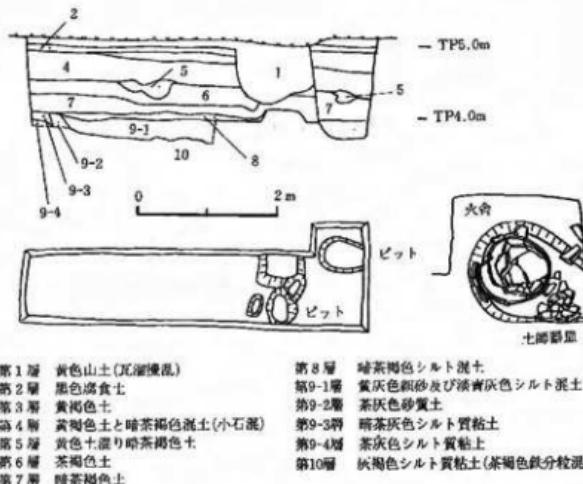
北半の高い部分の上層には、黒褐色～黒灰褐色系砂質土(第4-1層)の下には厚い第5-1層暗黄色の粗砂層があり、この層には弥生土器片～近世までの土器片を含んでいたが、旧濠部分の最も下層地山は、きれいな第12層淡褐色粗砂層となっていて、高い部分を占める第5-1層は、近世以降の浚渫作業により掘上げられた土砂であることが判明する。その下部には、暗灰色系の堅い砂質土(第10-1、2層)があり、下層部には多くのやや大きな瓦片のほか、凝灰岩塊・フイゴ片・鉄滓多数・土師器皿片等が堀へ捨てられる様な状況で出土している。

#### 5) 第5トレンチ(第19図)

本殿裏に設定した長さ約4.3mの東西小トレンチである。層序はやや複雑で、トレンチ西半のほとんどは第1・2トレンチ同様の灰色土をはさみ、黒褐色系の粉状の乾燥土と黄灰色土の混土(4-7層)が主体で、複雑に重層し、江戸時代後半の瓦片を多数含んでいた。また下部



第16図 第2トレンチ平面及び層序図・第7トレンチ断面図



第17図 第3トレンチ平面及び層序図

の第9層にも同期及び室町期に遡るとみられる焼けた小型の巴文軒丸瓦・軒平瓦片等を含む瓦類と壁土とみられる焼土塊を含んでいて、神社本殿を囲う幾時期かの土塁の存在が裏付けられる。東端で下層を確認しただけであるが、下層の第12層は、西側第2トレンチの盛土整地層の8層砂層と同じ層に相当する。

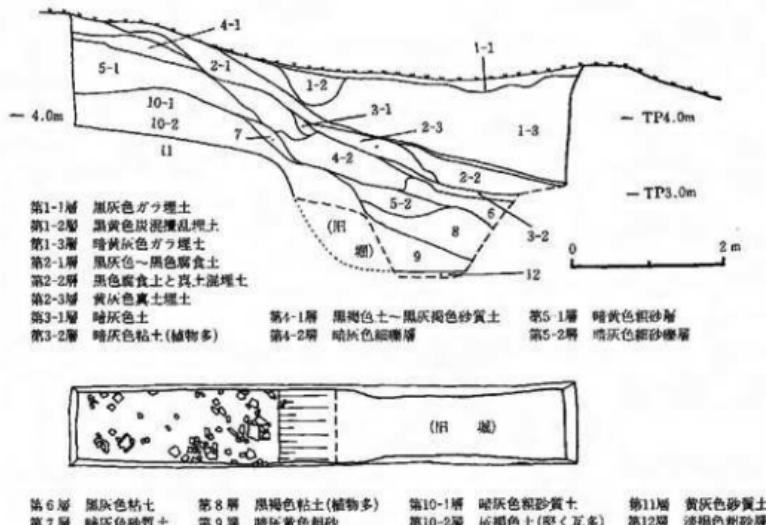
整地層の下部には黄褐色の堅い粘質土面があり、第1トレンチで多数瓦片とピットを検出した第8層上面のレベルには等しいが、東側に壇を造っているようで、その堆積土の第13・14層には古い布目瓦片が含まれており、削平されながらも周辺に若江寺関係の建物基壇等の存在も考えられる。

#### 6) 第6・7 (第16図)・8トレンチ

調査地の東側参道をはさんで、南と北に各々第6・8の東西トレンチを設定して調査を行った。第6トレンチは長さ19mあるが、地表下1~1.5mに至るまで近世後半~明治期の瓦・陶器類を多数含む灰色ないし灰黄色土の埋土で、もとあった周濠を埋めており、湧水が多く濠内の調査はできなかった。

北側に設けた第8トレンチ (長5.5m) でも同様で約1m程近世後半の埋土層があり、トレンチの北半東西に北側周濠の肩を検出したが濠内の状況については十分調査できなかった。

調査地中央北側に同じく東西に設定した長さ14mの第7トレンチ部分では、一部近年の攪乱がみられたが、上層全体に相当堅く整地されており、近世後半以降の第2~4層の下に、第5層の黄褐色小石混土、第6~1、2、3層の暗黄褐色と砂質土~暗灰褐色小石混砂質土からな



第18図 第4トレンチ平面及び層序図

る厚さ1mにも及ぶ社地整地層が存在し、その下には茶褐色～黄灰色細砂の地山層(8層)上にわずかに削平をまぬがれて第7層暗灰色砂質土がうすく見られ、中世前半期頃の包含層と考えられる。

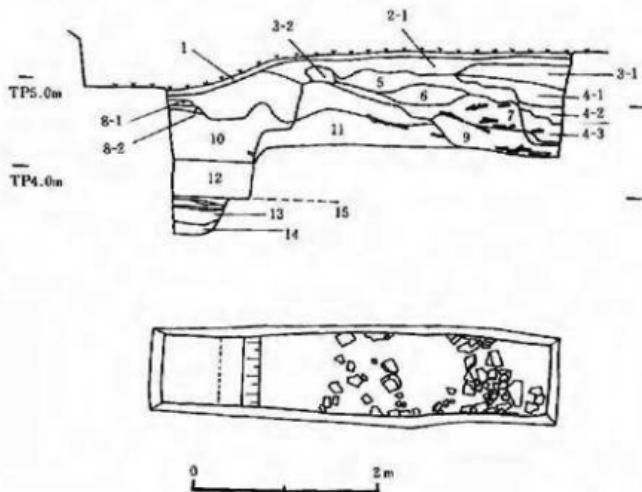
出土遺物については大半を省略したが第20図に一部を図示した。1～9は第3トレンチの祭祀ピット、11・12の瓦質すり鉢は第4トレンチ掘の肩部、18・19・21・22は第5トレンチより出土したもので、他の瓦の出土地は図に示した。

### 3. 小結

今回の調査によって判明したこと、あるいは推測できることについて簡単にまとめると次のとおりである。

1) 調査地周辺には、少くとも鎌倉時代以降近世までの瓦を用いた若江寺跡又は神社建物等の関連遺構が比較的浅い所に存在する。

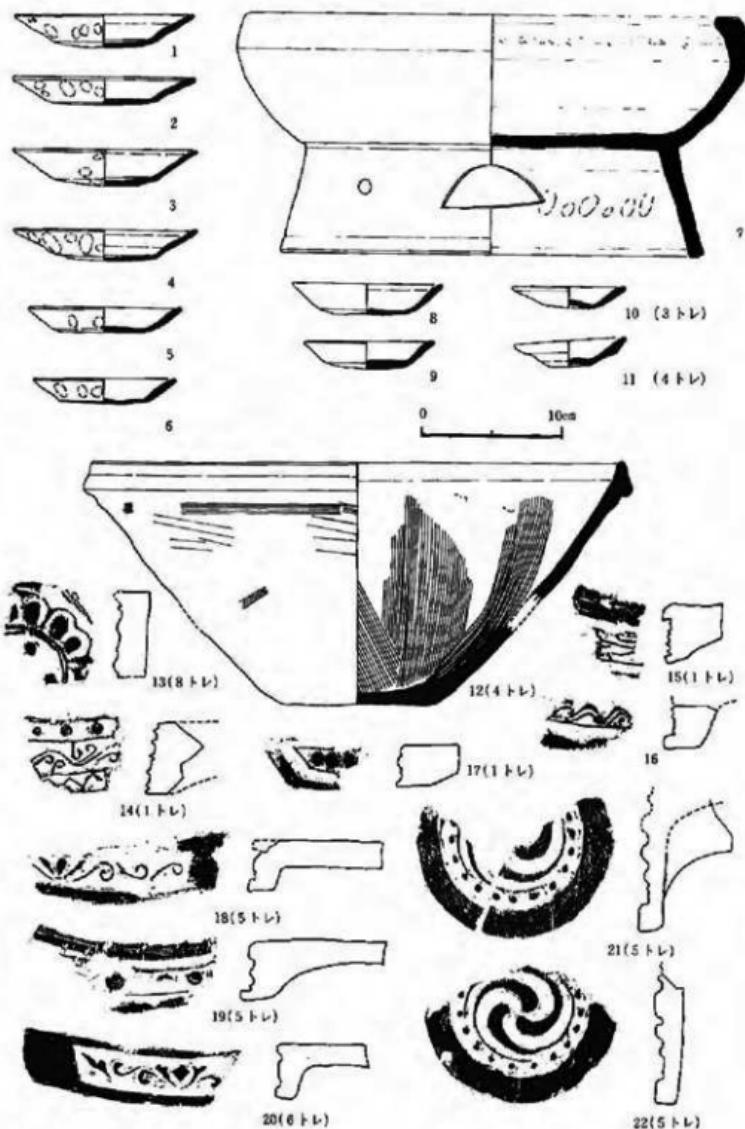
2) 若江鏡神社は、延喜式内の古社であることは、史上に裏付けられるものであるが、今回の調査により、現本殿(文政11年再建)より前の土壠が存在していたこと、さらに出土した焼けた古い巴文の軒丸瓦と壁土塊の存在から、さらに古い本殿に伴う土壠の存在が想定できる。享和元年(1801)刊行の「河内名所図絵」には二重の土壠が描かれている。



第1層	腐食土	第7層	黄褐色砂泥土
第2-1層	黒灰色砂質土	第8-1層	黄褐色土
第2-2層	黒灰色色砂混土	第8-2層	黒褐色粘質土
第3-1層	灰色土	第9層	黒褐色土(燧土塊混)
第3-2層	灰色汚土	第10層	黄褐色粘質土と黒褐色枯質土とのブロック土
第4-1層	黒褐色土(小石混)	第11層	暗灰褐色土
第4-2層	黒褐色砂質土(細石混)	第12層	暗黃褐色砂・シルト混土
第4-3層	黒灰色色砂混土	第13層	黄色シルト
第5層	黄褐色砂混土と黒褐色土の混土	第14層	暗灰褐色土
第6層	黄褐色砂混土と黄灰色粘土の混土	第15層	黄褐色枯質土

第19図 第5トレンチ平面及び層序図

3) 神社は近年まで南~西に堀の名残りをとどめ、本殿周辺は周辺地より約1~2mも高い形状と、さらに北西隅の「鏡塚(加賀美塚)」の存在から、前方後円形の古墳ではないかとも推測される程であったが、各トレンチの状況から全く古墳の形跡はなく、室町時代のはじめ頃に、相当な地盤の盛土整地・堀の掘削等の大土木工事が行なわれたようで、社地西半区域では下層に末期の瓦器片を含む多数の瓦類や一部ピット、土壤様の遺構の存在も考えられる所から、これらは直接的な神社関係のものとするより、西方区域を中心に存在したとみられる古代寺院の若江寺の関連が強く、寺の衰退の一方で、若江城の造営にあたり、寺院の動向と全く無関係でなかった神社を城域に含んで大整備され、城下の鎮守とされたものではないかと考えられる。



第20図 出土遺物実測図(1/4)

# 図 版

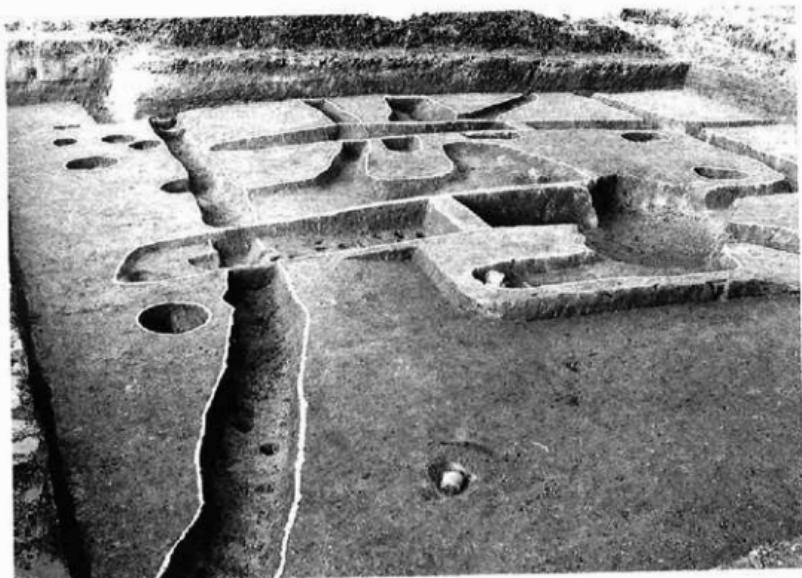


鏡塚の宝鏡印塔  
(笠部分以外は後補組立)

図版1 西の口遺跡第3次調査  
遺構



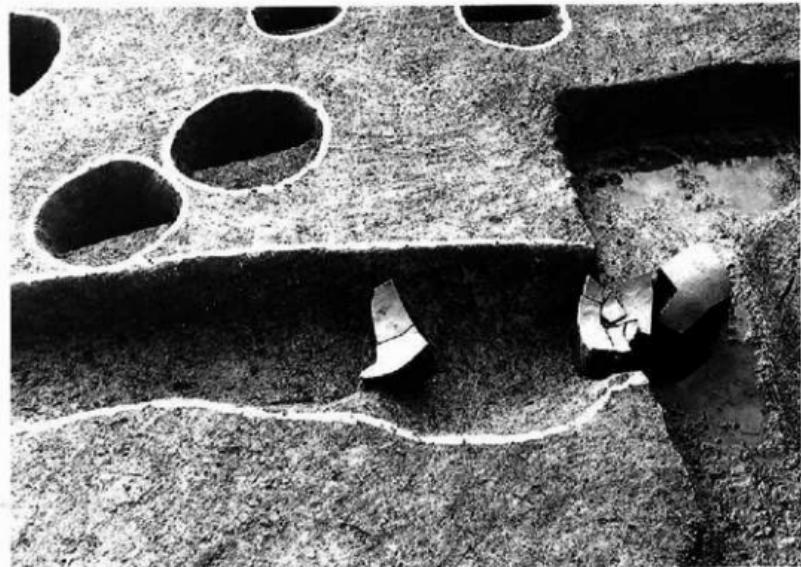
1. 調査地検出遺構全景(南より)



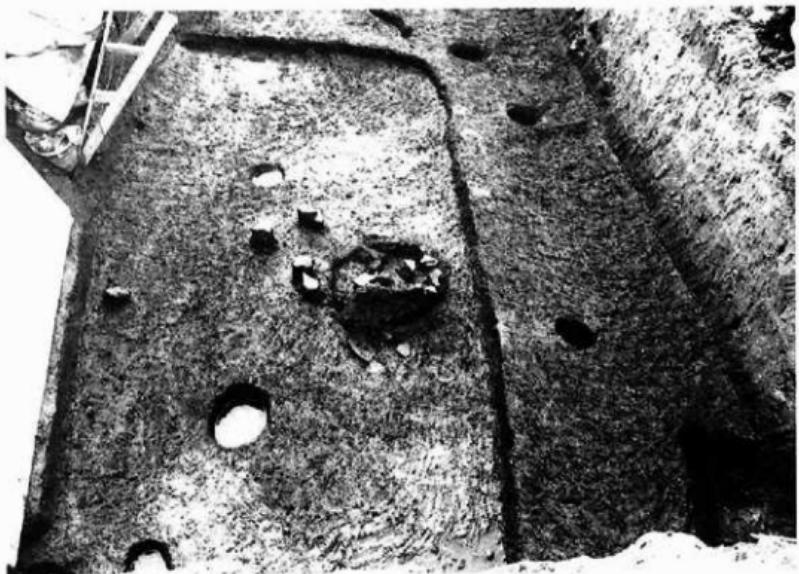
2. 調査地検出遺構全景(南より)



1. 古墳時代の遺構(北より)



2. 墓6内の須恵器



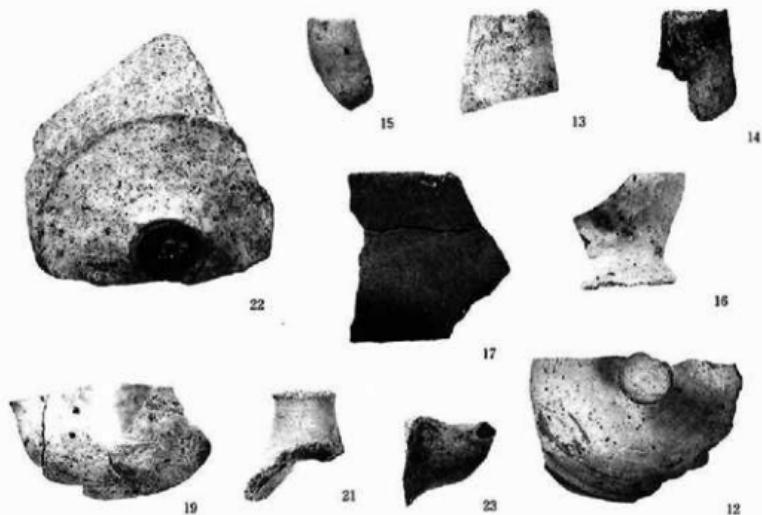
1. 垂穴住居路(北側)検出状況



2. 窓検出状況(東より)



1. 落ち込み検出状況



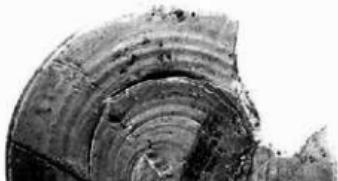
2. 壁穴住居跡内出土遺物(1)



20



2

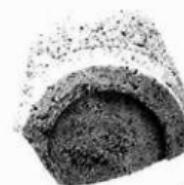


21



18

1. 壁穴住居跡内出土遺物(2)



11

2. 落ち込み内出土遺物



3



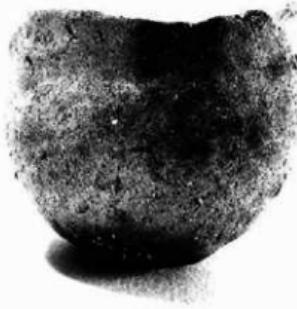
9



5



1



4



7



10

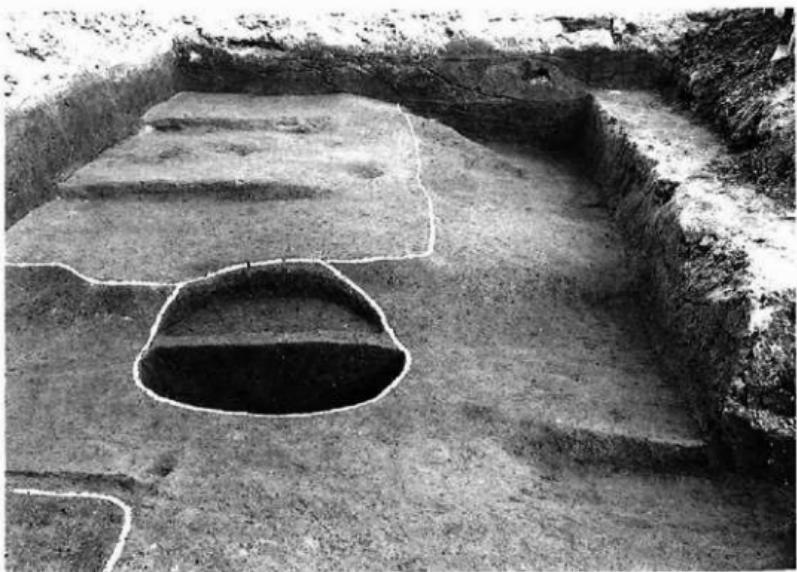


6



8

3. 第5層内出土遺物



1. 土壇南半(西より)



2. 土壇北半(西より)



1. 土壇北端の瓦列(南より)



2. 南西部分の土塀等(南より)



1. 第1トレンチの状況



2. 左に同じ



3. 第2トレンチの状況



4. 左に同じ



1. 第3トレンチ遺物埋納ビット他



2. 同上出土状況



1. 第4トレンチの状況



2. 左に同じ(南から)



3. 第5トレンチの状況



4. 第7トレンチ層序

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要32

西の口・鬼塚・若江遺跡の調査

－平成4年度－

平成5年3月

発 行 東大阪市教育委員会